

神奈川県看護協会

実施日：平成15年3月1日(月) 8日(月) 15日(月)

場 所：神奈川県総合医療会館および県内協力施設(施設見学)

テーマ：地域(まち)の看護職の人材活用システムの開発

対 象：40歳以上およびセカンドキャリアに興味のある看護職

定 員：100名

3月1日（月）

9:30～10:00

■ セカンドキャリアを生きる

講師：神奈川県看護協会 会長 浅川明子



研修の開催に先立ち、この研修の目的と期待される効果について講義を行いました。

【講義の概要】

1. 神奈川県看護協会の取り組み

神奈川では、OBからベテランのナースを対象とした研修メニューや集いの場への要望が高まり、2年前から研修を実施。そこから青少年健康教育出前講座へのボランティア派遣等の活動を立ち上げ実施している。こうした気運からもセカンドキャリア開発の必要性を感じている。

2. 期待される看護職の活躍

神奈川県は一度も看護職が余剰している時代を経験しておらず、現在でもナースセンターへの求人数は4千名を超えている。看護職員の安定確保のためには、定年後においても、キャリアを活用するという考え方を喚起することが必要であり、これが実現されることによって看護の質・量の充実が図られる。

3. セカンドキャリア開発支援研修開催の背景

現在、FTA（自由貿易協定）により看護師等を含む専門・技術職に関して、外国人労働者への労働市場の開放が求められている。また、国内の生産年齢人口は減少傾向の一方、老年人口は増加していることから、定年後の看護職の活用が課題となっている。看護協会に寄せられる求人の相談には、施設管理者や顧問としての指導、学校での福祉関連教科担当等、豊かなキャリアを持つ人材を望むケースも少なくない。県行政の3本柱の一つとして取り上げられている、次世代育成支援対策推進法の普及活動にもセカンドキャリア世代への期待がかかっている。

4. もう一度、見直してみよう人生80年時代を

自身の経験を振り返ってみても60歳は老年期ではない。職業上の世界観をさらに広げる途上であり、それを実行していただくエネルギーもある。また、自分自身の若さと健康を保つためにも、適度に自分を使い続けることが大切である。以上の理由から、定年後の看護職の活躍に大いに期待をしている。

■ 定年後のセカンドキャリア開発と ライフマネジメント

——よく働くこと、よく生きること——

講師：慶應義塾大学 商学部教授 清家篤

10:00～12:00

労働経済学の視点から、定年後のキャリア開発の必要性をお話しいただきました。

【講義の概要】

1. 高齢化のインパクト

寿命の長さ、進行のスピードともに世界に類をみない日本の高齢化をデータから検証。また、諸外国との比較から「高齢化とは社会の経済的成功の証」といえ、それを真に喜べる社会にしていけることが大切である。

2. 社会保障制度の変革

人口構造の変化にともない、年金制度、医療保険制度等社会保障の持続可能性を維持することが重要である。その中で、定年後の元気な高齢者層が引き続き働くことで、社会の支え手となることが求められている。

3. 長くなる人生を楽しむ

長寿化とは、個人にとって職業人生・消費人生・社会人人生が長くなることでもある。長くなる人生を有意義に過ごすためには、看護職等の職業的な能力や消費を楽しむ能力、地域社会とのつながりが必要である。

4. 長寿のリスクに備える

長寿は所得のリスク、疾病や介護のリスク、孤独のリスク等をともなう。これに対する備えとして、専門性の高い職業能力や人脈といった人的ストックと住宅や債券の運用といった物的ストックの活用が考えられる。

5. ビジネスのあり方も変わる

若年人口の減少により高齢者の活用が求められており、その実現のためには、年功によらない賃金・昇進等のシステムが必要。同時に、人口増が見込まれる高齢者層は、ビジネスの市場にとって大きな顧客となる。

6. 必要な政策対応

日本は今、健全な財政運営に向けた構造改革が必要であり、今後、都市・地方間の所得移転手段は公共事業に代わり社会保障制度が担うことが期待される。長い人生を楽しみ、活力ある社会を実現するために地域の果たす役割は非常に大きいものと考えられる。



■ 看護職に期待されるセカンドキャリア活動(1)

——行政の立場から期待すること——

——保健福祉分野での看護職の活動に望むこと——

講師：神奈川県鎌倉保健福祉事務所 保健福祉部長 杉澤素子



県行政の中で看護職にもっとも関わり深い保健福祉事業を運営される立場から、セカンドキャリア活動への期待をお話しいただきました。

【講義の概要】

1. 背景(高齢社会)

平成13年度の平均寿命(男性78.07歳、女性84.60歳)および健康寿命(男性71.9歳、女性77.2歳)の数値から、高齢社会の伸展を確認。

2. これからの心身の健康的な生活

心身の健康を保つために以下のことに気を付けたい。

- からだ.....食事と運動
- こころ.....ストレスと上手く付き合う
- あたま.....脳を刺激する

3. 保健所や市町村の行政における業務

県の動きとしては、平成9年に県保健所と行政センター福祉部を統合し、新たに保健福祉事務所を設置。地域における保健福祉施策の一体的な展開とサービスの向上を図っている。これにより、県の機関である保健福祉事務所は、専門的な相談・指導や広域的な立場から保健・医療・福祉に関する事業の企画・調整、情報提供を行うこととなる。また、市町村は乳幼児から高齢者まで住民に身近な保健・福祉サービスを一元的に提供することを業務とする。

4. 神奈川県臨時的任用職員募集

県保健所では、育児休業職員の代替職員として臨時的任用職員の活用を図っており、保健師・栄養士・管理栄養士等の有資格者の登録を募っている。

5. 県看護協会青少年健康教育出前講座ボランティア登録

平成15年7月に成立した次世代育成支援対策推進法の理念を踏まえ、県看護協会では会員による青少年のための健康教育ボランティアの派遣を行っている。その担い手として定年後の看護職の活躍が望まれる。

6. 行政の立場、保健福祉分野から望むこと

行政が実施する保健福祉業務は、「母子保健事業」「成人・老人保健事業」「栄養改善」「歯科保健」「地域福祉の事業」「介護保険」「福祉の補助事業」「母子相談員の設置」「生活福祉」などがある。いずれの分野も、看護職が専門的な立場から関わることで質の高いサービスを提供できることが期待される。医療施設と行政を比較した場合、業務内容や職場風土、サービスの対象など異なる。医療施設との違いを踏まえた上で、これまでの経験や看護職の特性を生かし、既存の行政での取り組みの拡充やサービスの質向上に寄与することが期待される。

■ 看護職に期待されるセカンドキャリア活動(2)

——看護職が行うボランティア活動——

講師：神奈川県社会福祉協議会 かながわボランティアセンター 小野智明

県内でボランティアグループに関する総合相談やセルフヘルプ活動の支援を行っている実績を元に、看護職のボランティア活動の可能性についてお話しいただきました。

【講義の概要】

1. なぜボランティアなのか(ボランティアだからこそできることとは何か)

共に支えあう(共生)地域社会づくりを推進するためには、ボランティアは不可欠であり、市民・行政と共同し、新たなパートナーシップを創っていくことが求められている。社会福祉協議会では、ボランティアをコーディネートし、ボランティアを増やすことや、ボランティアの相談に応じている。「ボランティアをやりたい人」と「ボランティアに来てほしい人」2つの立場にたって中立性を保ち、双方のマッチングを図っている。



2. ボランティア活動とは何か

ボランティア活動の実体を考察すると、以下のように定義できる。

- 活動の特徴.....自主性、社会性、無償性に根差している
- 活動の頻度.....継続ボランティア、短期単発ボランティアに分類される
- 活動の内容.....課題中心型とエリア中心型に分類される

3. 人はなぜボランティア活動をするのか

人がボランティア活動を行う動機としては、以下の理由が挙げられる。

- 社会.....友人に誘われて参加する
- 価値.....生活が大変な人に支援、助けることが大切なのだと感じる
- キャリア.....新しい体験の機会を探す手がかりにする
- 理解.....物事の新しい見方を学ぶ。直接的な学習の欲求する。
- 保護.....トラブルをさける。孤独になるのを避ける。
- 尊敬.....自分が必要な人間なのだという意識を高める。

4. 広がるボランティア活動

ボランティア活動の浸透とともにその内容も多様化している。

- 環境関連.....海岸清掃、道路清掃、リサイクル
- 外国人関連.....日本語学習、国際交流支援
- 高齢者関連.....家事援助、配食、送迎、外出サポート、話し相手、訪問
- 障害者関連.....ガイド(誘導)点訳、手話、要約筆記
- 子ども関連.....おもちゃ・遊具製作、保育、健全育成、学習支援
- 文化・スポーツ関連.....上演・演奏、スポーツ・レクリエーション指導、文化伝承、観光ガイド
- 生活関連.....住居修繕、日常生活用品の制作、交通安全、防犯
- 専門技術関連.....学習、IT提供、技術提供
- 健康関連.....心の病を持つ方の支援、病院ボランティア など

5. 技術が求められるボランティア

看護の技術が生かされるボランティア活動としては、次のような活動が考えられる。

- セルフヘルプグループ ●医療通訳・通院ボランティア ●乳幼児相談ボランティア・障害児

余暇活動支援・難病の子どもの個別支援 ●短期単発ボランティア(乗馬補助、キャンプ付き添い)
●時間預託 ●介護保険・介護保険以外の在宅福祉サービス

6. ボランティア活動はどこで見つけるか

ボランティア活動の情報が掲載されている、新聞、口コミ、友人からの紹介、飛び込み、ボランティア情報誌を紹介。その他、県内のボランティア団体の連絡先をリストアップし、参加者に配布。

7. セカンドキャリアのために

神奈川県社会福祉協議会が運営するかながわ福祉人材センターに寄せられた看護婦求人件数は、平成15年4月から16年2月までの間に189件。その内年齢不問も82件に上り、セカンドキャリアを目指す人材の活躍の場が広がりつつある。

3月8日(月)

10:00~12:00

■ セカンドキャリア活動の実際

——地域での感染講話「感染防止」——

講師：(株)SRL感染サポート部 砂金悟



院内感染防止サポートに実績を持つ医療関連メーカーの方を講師に迎え、保育園や福祉施設等での「手洗い、うがい」方法についてお話をうかがいました。

【講義の概要】

1. 手洗いの重要性と方法

感染予防に最も重要だと言われている「手洗い」であるが、正しい手洗いが守られていないのが現状である。今までの衛生教育では、「咳やくしゃみをする時には手を口にそえない」と厳しく躾けられる。しかし、その手をどうしなさいとまでは教えられてない。また外から帰ったら、食事の前には「手を洗いなさい」と教えられるが、どのように洗えば良いかどこに注意して洗えばよいかも教えてもらっていないのが実情である。その結果、動機不在の独自手洗いが多くの人々に根付くことになっている。感染防止で重要な「手洗い」は、「感染経路の遮断」であり、それを効果的・効率的・継続的に実施させるには次のことが必要と考える。手洗いの意義(なぜ手を洗うのか)、タイミング(いつ洗うのか)、方法(どのように洗うのか)を体系立てて理解することが必要である。分かっている、知っていてもなかなか定着しない手洗い。この遵守を広く社会に広めることが、これからの院内感染防止に強く結び付くこととなる。

2. 地域での健康講和—手洗いボランティアの実際—

これまで、保育園の園児、中学校の生徒を対象に、パワーポイント(当日は紙芝居にして配布)を用いて手洗いの方法について健康講和を実施している。事前に担任教諭と情報交換し、対象に合わせたプレゼンテーション内容を検討し、実施したところ、インフルエンザの罹患率が低下した施設があった。対象が理解できる言葉、興味を持てる教材を開発し、担任教諭と十分に相談した上で実施することが重要である。

■ 起業家・施設管理者としてのセカンドキャリア(1)

——グループホームの起業と運営の実際——

講師：活人会痴呆性高齢者グループホーム横浜はつらつ所長 田中香南江

13:00～16:00

定年退職後、グループホームを起業した経験に基づいて、看護職の起業についてお話しいただきました。

【講義の概要】

1. はじめに(痴呆性高齢者グループホームとの出会い)

行政の中で保健士として勤務した経験から介護の問題に関心を持ち、国内初の痴呆性高齢者グループホーム「函館あいの里」を見学したことを機に、自分もいつかグループホームをやりたいと考えるようになった。



2. 痴呆性高齢者グループホームの誕生

痴呆性高齢者の居宅介護は家族の負担がきわめて大きく、痴呆への認識不足から適切なケアが行われていないケースも後を絶たない。また、施設介護の場合でも大型の施設環境は痴呆性高齢者に合わせて創設されたものとは限らず、より人間的にケアできる場が求められていた。こうした背景のもとに、介護保険の適用（痴呆対応型共同生活介護）が受けられるグループホームが誕生した。

3. 痴呆性高齢者グループホームとは

グループホームにおける経営管理者の役割は、痴呆になってもその方らしい、豊かで明るい生活を最後まで送れるよう、活力ある日々を支えて寄り添うようなケアが実践できるよう質とコストをマネジメントすることである。外部・内部評価を実践し、地域社会に開かれたグループホームになるよう調整することも重要である。

4. 痴呆性高齢者グループホームの立ち上げ計画について(開設に向けて)

- 計画……活人会の理念「子どもから高齢者までの地域支援」のもとに、老人保健施設を計画する段階でグループホームの併設を計画。横浜市と国に老人保健施設併設の申請を提出。
- 建物……市の老人保健施設併設グループホームへの建設補助金制度を申請し、設計段階では「家」であることを関係者と意思統一。
- 人材……内定者に対し事前学習と研修を実施。グループホームのケアの理念の徹底を図る。
- 地域理解……痴呆への理解を進めるため、町内会、社会福祉協議会、民政委員会、児童委員会などの役員会で開設予定パンフレットを配布し、説明を実施。

5. 痴呆性高齢者グループホームの運営について

グループホームにおける経営管理者の役割は、痴呆になってもその方らしい、豊かで明るい生活を最後まで送れるように、また、活力ある日々を支えて寄り添うようなケアが実践できるように質とコストをマネジメントすることである。外部・内部評価を実践し、地域社会に開かれたグループホームになるよう調整することも重要である。

6. まとめ

厚生労働省老健局長の私的研究会である高齢者介護研究会は、平成15年に「2015年の高齢者介護」を発表。高齢者の尊厳を支えるケアの確立への方策として「新しいケアモデルの確立：痴呆性高齢者ケア」が取り上げられており、グループホームの方法論は痴呆性高齢者ケアの中で重要な位置を占めていくものと思われる。

13:00～16:00

■ 起業家・施設管理者としてのセカンドキャリア(2)

——特別養護老人ホームの運営の実際——

講師：特別養護老人ホームさつき 施設長 高木裕子

横須賀老人ホーム 看護師長 山本匡子

定年退職後、介護施設の管理者をなさっているお二方に、看護職が行う老人ホームの施設管理についてうかがいました。

【講義の概要】



● 高木裕子さん

「特別養護老人ホームさつき」は、神奈川県初の小規模単位型特別養護老人ホーム（新型特養）として平成15年12月に開設。新型特養は平成14年度から国の特別養護老人ホームの基本的な整備方針となっている。その特徴は、入所者ができる限り在宅に近い生活を営むことができる「個室＋ユニットケア」を基本としているところにある。集団対応・一律の日課・4人床や大食堂といった非日常的空間でのケアが多かった従来の特養の課題を解決するため、8つのユニットを8軒の家の集合体ととらえ、1つのユニットの利用者同士は家族と考えている。ハードとしては、家族（ユニット）ごとに食堂・居間・浴室等が完備され、ソフト面では、スタッフも家族の一員として利用者に接する。今後、このような施設においては、人の気持ちに沿うサービスを提供するプロとしての介護職と健康面でのリーダーシップを発揮する専門職としての看護職の共同作業によるケアが不可欠である。特養での看護職には医療判断が必要とされる場面も多く、看護の力が試されるともいえよう。



● 山本匡子さん

看護師の役割は、看護実践、教育・指導、調整、管理、研究・開発（JNA看護婦の業務指針）であり、職場は病院・診療所、学校・保健、地域看護（保健所・訪問看護・福祉施設）、教育・行政機関がある。老人ホームでは、日常生活の看護管理、健康管理、疾病の対応、受診の判断・処置・与薬・観察、ターミナルケア等があり、疾病でない人の死にどうかかわるかということも重要である。老人ホームで死をむかえる方に対し、どこまでの医療を提供するか（点滴・酸素吸入・経管栄養）、利用者や家族の「おまかせします」「畳の上で死にたい」「ポックリ死にたい」ということへどう対応するか、看護職がどのように関わるかがポイントになる。「自然な死」「健康な死」への援助に向けて、スキルミックス体制でスタッフの教育や利用者のサービスの質管理をコーディネートしていくことが重要である。

3月15日（月）

9:30～12:00

■ 施設見学



2名～4名程度の小グループに分かれ、県内の特別養護老人ホーム、介護老人福祉施設、グループホーム、訪問看護ステーション等11か所の施設を見学しました。

見学先：特別養護老人ホームさつき、特別養護老人ホームシャローム、介護老人福祉施設芭蕉苑、痴呆性高齢者グループホーム横浜はつらつ、グループホーム青葉台、グループホームみのりの家、グループホームふれあいの家こすもす、済生会南部訪問看護ステーション、神奈川区メジカルセンター訪問看護ステーション、横須賀市健康福祉協会よこすか訪問看護ステーション、県看護協会立かがやき訪問看護ステーション

■ グループワーク

14:00～16:00

施設見学の結果を踏まえ、施設の種別ごとの4グループに分かれてディスカッションを行い、自身のセカンドキャリアへの展望について発表を行いました。

【グループワークの流れ】

1. 体験の共有

→自己紹介とともに、施設見学の結果を報告し合い情報の共有化を図る

2. セカンドキャリア開発のあり方

→自分自身の課題・社会や協会への提言について話し合う

3. 発表

→グループごとにディスカッションの結果を発表



【各グループの発表より】

●Aグループ（訪問看護ステーションを見学）

医療技術が求められており、専門技術を身につけたナースへのニーズがある。運営については非常勤・パート・アルバイトが多い方が黒字経営につながるという構造が見えた。業務についてはヘルパーとナースの業務区分が難しい側面もあり、病院直結、医師会直結でない場合はドクターとの連携に気を遣うらしい。自身の課題としては、長期化する老後を考えると無償のボランティアには疑問の声もある。収入を得ながらボランティアもできれば理想的である。起業まではできなくとも資格を生かしていきたい。そのためにも意欲向上につながる研修を続けて欲しい。

●Bグループ（特別養護老人ホーム、介護老人福祉施設を見学）

入居者のプライベートゾーンの確保を重視した家庭的な施設、キリスト教の宗教観に基づいてケアをする施設、終のすみかとしてのターミナルケアに力を注ぐ施設等、施設ごとに特色が異なるが、共通の事項として看護師は日勤者のみであり、夜間体制が課題とのことだった。今回の研修はさまざまな知識を持った人の中で視野を広げることができ、大変有意義であったので継続して欲しい。高齢の労働者を受け入れ、若者の負担を分かち合えるような社会づくりに行政も力を注いで欲しい。

●Cグループ（グループホームを見学）

各施設とも入所者9名くらいと小規模。思ったより重症という印象はなく、職員は入所者自身ができることはできるだけ自分ですよう「誘導を兼ねた関わり」を心がけており、声かけ等にも人間尊重の姿勢が見られた。施設によっては一人で夜勤をすることもあるようだ。この研修を通じて「老い」という誰の身にも必ず起こる事実を受けとめ、健康な間は少しでも誰かのためになりたいという思いを強くした。70歳を過ぎてこの研修に参加し、他のまだ若い参加者と一緒に話せる幸せに感謝したい。周囲にもこの研修を周知していくので、ぜひ継続して開催することを望みたい。

●Dグループ（グループホームを見学）

グループホームの特色として、個人の気持ちやニーズに沿ったケアをスタッフが徹底していることが挙げられる。車いすの代わりに椅子にキャスターを付けて使用するなど、コスト面にも工夫がみられる。スタッフは24時間体制のため夜勤もあり、非常勤スタッフが多い。研修の感想としては、退職後ボランティア活動を起業へ結びつけられるかは疑問、デイサービスのな託老所をやってみたい、週3日程度の夜勤であればボランティアをしてみたい等の意見が出た。看護協会には、看護職が生涯現役で活躍できるよう、起業のアドバイザー的役割を担って欲しい。

受講者の声

- 定年後の自分の姿を重ね、各講義を受講した。現在の安定した状況の中で、浮き足だつ思いが先行していたが、講義の中で現実の厳しさを秘めながら、活動されている状況聞き、地に足をつけた考えと行動をしなければと反省した。
- グループホームがどういうものか勉強になった「死について」のことは病院で行われている現実のことであり、とても共感できた。お話一つ一つがすばらしかった。
- ブランクがあり、病院勤務に就いて今後どのような活動ができるのか。グループホームも知りたいと思い、参加。実際に活動している人の話を聞き、研修参加者の意欲を知り、とてもよい経験ができた。
- 多勢の先生方の講義を受けられたことに感謝。退職後の生活についても考えられるようになった。少しでも社会のため、自分のために無理せずお役にたてるよう過ごしていきたい。
- 仕事の都合で全日程に参加できず残念。特に施設見学はしたかった。またこのような企画をしてほしい。
- 看護師は継続して働き、キャリアを積んだ人たちがベテランとなって老人社会を牽引していくものと思う。臨床経験だけでない知識を得る機会になった。
- 状況が許される限り生涯現役を実現しなければと思う。定年後の社会貢献、自己実現を考えるよい機会だった。
- グループホーム・老人福祉施設で実際に仕事に携わる人の話を聞いたのはとても有意義だった。
- 当研修が継続されたら、地域に貢献する人材の確保につながると思う。
- 起業家の話は励みになるが、定年を目前にしてからでは遅すぎると思う。
- 定年後の過ごし方に迷っている人が多いようなので、グループワークを多くし、考える時間を多くするとよいと思う。
- 年齢制限で就職が難しいと考えていた。70才まで可能な施設もあるということで研修に参加し、自己啓発を図りたいと思った。
- 病院での仕事しか知らなかったのも、特養の見学は新しい発見をした。
- なんとなく社会から引き下がってしまいがちだが、この研修から大きな人生への「勇気」をもらった。協会に感謝する。
- 過去のセカンドキャリアの就職先等、現在の求人がどのようなものであるかデータがほしかった。
- 高齢化時代が進んでいる中で今回のセカンドキャリア研修は大変興味深く勉強になった。多くの定年NSが自分の第二の人生を「いきいき」と生きるためにもこのような研修で勇気を与えてもらえるとてもよい。
- 県内にセカンドキャリアの連絡網を作り、災害・テロ等で救助が必要な時に応援できる援助の手がかりになるとよいと思う。
- 定年退職後の仕事に対する待遇や今後の期待される仕事の内容等、具体的な部分や紹介等が知りたい。
- 地域社会の中で、専門知識を元にした助言がしてあげられるボランティア活動だが、どのようなボランティアが自分にできるのか指針となるものがほしい。
- 第2の職業として託老所(ディサービス)を開所する際の指導があればありがたい。
- 居住地の近くでボランティア等募集している施設の情報を知りたい。
- 定年とはいわず、定年前から出席できればよいと思う。40歳くらいから参加できればよかったと思う。
- 自分自身が健康管理をして働ける間は働ける社会であってほしい。若い人への負担が少しでもかからないようにしたい。
- 現役を退いたNSへの定期的教育・支援などがあればいいように思う。社会貢献の原動力になるのではないかな。
- 体力的に少しおちてきた50～60才の我々にできる看護師としての仕事は何か、必要な知識があればその研修などをしてほしい。